宮本輝・『西瓜トラック』

――〈自己〉の呼び掛け――

酒井英行

私は、机に戻り、原稿用紙に〈西瓜トラック〉と題を書き、そのトラックの周辺をうろつきだした。何かが生まれそうだが、何が生まれるかわからない。しかし、本当に熊本から来たのかどうかは眉唾にしても、生きるという闘いに関して逞しかった西瓜売りの男が書ければいい……。(『生きものたちの部屋』)

二十歳(成人)になる日を目前にした、市役所の職員である「ぼく」。「与えられたその日の仕事だけをこなしていけば、一生食いはずれのない職場」である市役所……。「ぼく」の社会的役割としての生の形は、感激性、生の燃焼から疎外されたもの、オートマチックに安定化したものだと言えよう。「ぼく」が世間に見せる顔、「ぼく」のペルソナである。「ぼく」の日々の生活の外観には、「地道」に生きることを選びとっている人間の退屈な凡庸さが漂っているのである。

いまのぼくは、年に二回か三回休暇を取って、海辺の村や町を旅するために、市役所の保険年金課の机の前に、定時から定時まで坐っていると言っても言い過ぎではないのだ。

「地道」な生き方を現実の生の形に選んだ人間の、凡庸な内面の何気ない吐露と見られなくもない。社会的役割遂行の無意味さ・虚しさから逃れたい思いを、海辺への旅の憧れに託しているだけかも知れない。「ぼく」は、公務員として、いや、人間として、言い立てるほどの特異さを隠しているわけではなさそうである。公務員として生きるうえで、特に不適応な余剰な何かを持っているふうでもない。公務員として、いや、社会に適応して生

きていく人間として、平凡な面持ちをしたありふれた人間だと言うべきであろう。

自分が他の誰でもない自分である所以の領域、それほどに大切な部分でありながら、他人に話しても共鳴してもらえそうもない心の内奥の襞、いや、他人に話すことさえ無意味だと感じられる内奥の思い……。社会生活を営む日々のなかで堆積していく沈殿物のような個人の思い。そのような個人の思いと言う他ない何かが我々の生の聖域だと言えるだろう。しかし、我々は、その生の聖域を覆う厚い表皮とも言える仮面（役割）によってしか、他者と関わり合うことが出来ないのである。市役所の職員という「ぼく」のペルソナ（無論、まだ固定化し、安定したペルソナであるわけではないが）、彼はその社会的な顔・仮面の内側にいかなる聖域を潜めているのだろうか。

「海辺の村や町を旅する」夢……。「与えられた」ルーティン・ワークを、「定時から定時まで」、機械のように無感動にこなしていくことで消費されていく「ぼく」の若々しい生。空虚なルーティン・ワークに適応することで枯渇していく「ぼく」の青年期。本当の自分（の聖域）が浸食され、過ぎていく時間のなかに自分が埋もれていくような徒労感・虚しさ、そこからの失地回復、自己治癒の強い願いとしての夢……。

社会的役割に自分が埋没してしまい、仮面が素顔と化してしまった大人の、休日の趣味・娯楽のひとときによる自己解放のくつろぎと似てはいるだろう。大人の仕事の休暇のくつろぎは、素顔と化した仮面の緊張を和らげるためのささやかな休息であろう。しかし、成人式をまだ迎えていない「ぼく」は、自分の生の形を本当には決定していない柔らかい存在なのである。安全地帯である生の形をまだ定立し得ていない未成年なのである。〈自己〉（『西瓜トラック』論では、〈自己〉を、河合隼雄『無意識の構造』の「自己はユングの定義に従うかぎり、あくまで無意識内に存在して、意識化することの不可能なものである。人間の自我はただ、自己のはたらきを意識化することができるだけである。」の意で用いる。）の呼び掛けに容易に反応して揺らいでしまう不定形な存在なのだ。「ぼく」の「海辺の光景」への憧れには、素顔に馴染まない仮面を取り外してしまおうとする強い衝動が秘められているはずである。

市役所に勤務するようになってから、「いち日に三回珈琲を飲む習慣がついてしまった」「ぼく」……。仕事に出

掛ける前に飲む朝の珈琲、昼休みに市役所の地下の喫茶室で飲む「大味な珈琲」。

それから役所が退けて、バイクで帰ってくると、家のすぐ近くにある「ランプ」という名の小さな珈琲専門店に行く。本当に欲しくて口にするのは、この夕方の「ランプ」での一杯だけだ。量は少ないけれど、味の濃い、コクのある珈琲で、飲んだあと一時間くらいは食欲がなくなってしまうが、ぼくは「ランプ」のいちばん奥の席に腰かけて、小窓から家々の屋根を眺めるのが好きだ。

社会的役割（仮面）から解放された時間を味わっているのだ、とひとまずは言えるであろう。「ぼく」が朝・昼に珈琲を口にするのは、惰性的に流れていく無意味な時間に、言わば読点を刻む営みである。大人のくつろぎ、大人が趣味、娯楽によって仕事の疲れを癒すのと同じ営みであろう。市役所の職員の仮面を被る違和感、ルーティン・ワークをこなす空虚感から逃れるための珈琲だと言えよう。仮面を脱ぎ捨てようとする意志のない、自己逃避、現実逃避の後向きの逃げの姿勢で飲む珈琲。しかし、夕方、「ランプ」で飲む一杯の珈琲は意味が違うのである。「本当に欲しくて口にする」珈琲、「味の濃い、コクのある」珈琲、食欲を失わせる珈琲、これが「ランプ」の珈琲なのである。

現実社会において小ぢんまりと安定する（外形的な生を安定させる）ために、「地道に暮らす」という「利口な生き方」を選んでいる現実の「ぼく」。その気弱な打算的選択によって、「ぼく」は、生きている実感、生きている確かな手応えから疎外されているのである。市役所の職員という仮面（まだ固まりきらない柔らかい仮面）の内側に、生の燃焼の欲動を閉じ込めて、飼い殺しにしようという臆病な「利口」さ。そういう「ぼく」の偽りの「利口」さに反発し、仮面を剥離させようとする本能的な衝動。「味の濃い、コクのある珈琲」への強い欲求、それは生きている実感、生の燃焼への激しい渇望である。「飲んだあと一時間くらいは食欲がなくなってしまう」珈琲……。食欲は人間の生命維持装置と言えようが、その装置を一時的に破壊させる「味の濃い、コクのある珈琲」。仕事から解放されて、市役所を離れた「ぼく」のこの珈琲への渇望は、安定した「地道」な彼の生の形を脅かす危険な欲望と言う他ないのである。

「本当に欲しくて口にする」珈琲、それを飲むために行く喫茶店が、「ランプ」と名づけられているのは象徴的

と言う他あるまい。「ぼく」の無意識の暗闇に光を当てて、「ぼく」の〈自己〉を意識化させてくれる場所（装置）が、「ランプ」と名づけられた喫茶店なのである。自我の内奥の無意識（〈自己〉）に向き合う場所、それが「ランプ」という喫茶店である。

「ランプ」の小窓から見える街は、ぼくが生まれ育った、もういやというほど眺めつづけてきた場所だったが、煙草の煙を胸に吸い込んで、珈琲カップを鼻先に持ってくると、そのときどきで、雨に濡れたり、西陽に照らされたりしている家並の底から、潮風やら群青色の海原やらが炙り出されてくる。そして、こんどは土曜と日曜を挟んで合計五日くらいの休みを取り、どこかうんと北の方の海を見に行こうかなどと、手帳を開いてスケジュールを練りながら時間を過ごすのだ。

「ぼく」にとって、「ランプ」は〈海〉に通底する神聖な場所なのである。東舞鶴として特定化される「北の方」の〈海〉。「もういやというほど眺めつづけてきた」見飽きた町並み、「ランプ」で珈琲を飲む儀式によって、そこから浮上させることの出来る〈海〉の生き生きとした風景。「ぼく」の意識（自我）にとっての向こう側、つまり、「ぼく」の無意識の世界の喩としての海辺の風景。「人っ子ひとりいなかった」寂しい「舞鶴という海辺の町」、それは「ぼく」の〈自己〉に他ならない。

「ぼく」の意識（明るみ）と無意識（意識の周縁、辺境の暗がり）との対比に、「ぼく」が育ってきた地方都市の「雑然とした街並」と「北の方」の海辺の風景との対比が重ねられているのは明らかである。「ぼく」の後者へのひたむきな傾斜を通して、浮薄な消費社会である都会（生活）の否定、という宮本輝の社会（時代）批評が表現されていることは明白だろう。高度経済成長の賑わいと無縁である日本海の寂しい風景への「ぼく」の激しい憧れには、経済的な豊かさに毒された虚しい都市住民の自己否定の思いが投影されているだろう。都市生活者の日常性を異化し、精神的疲弊、枯渇感を癒し、精神に活力をもたらす場所としての日本海の寂しい風景。しかし、高度経済成長（都市生活）への違和感、懐疑は、『西瓜トラック』のテーマを補完する低音部に過ぎぬであろう。作品のテーマとして前景化しているわけではない。

海辺の風景の中に降り立ったときにだけ、「心に不思議な勇気」が湧いてきて、「生きていることをしあわせだと感じる」劇的な時間に恵まれるのは、「ぼく」が、自分の

無意識、無意識内に追放した自分（〈自己〉）と出会っているからだと言えるであろう。物心がついた頃から、「温和しくて目立たない」子供であった「ぼく」。周囲に向けて自己主張することの少ない控えめな子供、という社会的役柄（仮面）に自我を禁圧していた「ぼく」。仮面の下に抑圧しきれない余剰な部分を、無意識内に沈殿させ続けてきたのであろう。それが「ぼく」の自我防衛の心理機制であったはずだ。しかし、成人式を目前にした「ぼく」の仮面の内側の自我は息苦しさに悲鳴をあげているのである。自我に活力を取り戻すために、無意識の世界からの声（〈自己〉の呼び掛け）に向き合わねばならなくなっているのだ。

大人の仲間入りをする通過儀礼の日を目前に控えて、市役所の職員という社会的役割を選びとってはいるが、気分的にはまだモラトリアム人間でしかない「ぼく」の自我（仮面）が揺らいでいるのだと言ってもいいだろう。

夏の終りの閑散とした駅に降りたとき、ぼくは舞鶴という海辺の町の寂しさに心を奪われた。（中略）ぼくはそのとき、働くようになって、自分のお金が自由に使えるようになったら、この駅に、それも雪の降る冬のさなかに、もう一度来てみようと思ったのだ。このうらぶれた東舞鶴の駅から、ひとり日本海への道を歩いてみようと。

高校二年生の夏の日に抱いた願望、日本海の寂しい暗がり、荒々しい冬の風景に潜り入ろうとする欲求。西瓜トラックの男との出会い以前に、若狭方面への旅が、友達との間で約束されていたことは確かだとしても、旅先で降り立った東舞鶴駅周辺の風景へのこのような強い憧れの裏に、西瓜トラックの男との出会いの衝撃が隠されていたことは確実であろう。「一月十五日の成人の日には、舞鶴から丹後半島への旅行を計画している」というふうに持続している舞鶴（裏日本の海辺の風景）への強い思い入れの奥底に、西瓜トラックの男が存在していることは確かなはずだ。西瓜トラックの男に手招きされるかのように、成人式の日に、裏日本の海辺の空間に立ちたいという強い欲望……。

午後からの単調な仕事を片づけ始めたぼくの心に、あいつの姿が何度も浮かんだ。そして、どういうわけか、あの東舞鶴の駅前通りの光景が重なり合ってしまう。残暑に噎せかえる裏日本の、静まりかえった海辺の町のどこかから、黒光りする背や肩をあらわにしたあいつが、西瓜を山積みにしたトラックに

乗ってやって来るさまを空想してしまうのだった。

「ぼく」の心のスクリーンに何度も浮かび上がってくる西瓜トラックの男。「どういうわけか」、高校二年生の時、旅先で降り立った東舞鶴の光景と打ち重なって、その姿が脳裏に浮かんでくるというのである。「どういうわけか」、「ぼく」の脳裏で、西瓜トラックの男と東舞鶴の光景とが二重写しになっている、というのである。「どういうわけか」という、「ぼく」のためらいがちな、言葉を濁す語りには、「物心がついた頃」から「温和しくて目立たない」人間であり続けた「ぼく」の、自己韜晦に逃げ込む惰性的な臆病さが現れているだろう。本当の自分に向き合って、内奥の〈自己〉を直視することから逃げてしまう気弱さ。しかし、成人式の日に舞鶴に旅立つ計画を持っていることから窺えるように、「ぼく」は、通過儀礼として、西瓜トラックの男の姿と日本海の風景とが二重写しになる理由に向き合おうとしているのである。舞鶴の海辺の町から、西瓜を山積みにしたトラックに乗って、西瓜トラックの男がやってくる様を、脳裏に鮮明に思い描くことを契機にして、西瓜トラックの男と共有したあの夏の日の、情念が激しく揺らいだ体験に、「ぼく」が立ち戻る、というように作品は展開しているのだ。高校二年の夏、東舞鶴からやって来た西瓜トラックの男に出会い、その男に強烈に牽引されて湧き立った情念。その直後に旅に出て、「ぼく」の内部で渦巻いていたその情念を投影して眺めたからこそ心惹かれた東舞鶴の光景……。

「ぼく」の、東舞鶴の風景の中にはまり込もうとする心の傾斜の動因は、西瓜トラックの男へのアンビバレントに揺らぐ欲望であったはずである。

高校二年（十七歳）の真夏、「凄い夕立ち」のさなかに遭遇した西瓜トラックの男。

去年の夏も、ここで西瓜を売っていたのだと男は教えてくれたが、ぼくには覚えがなかった。いつも自転車で通る道なのに、ぼくが見たのは、ことしが初めてだった。

『西瓜トラック』のようなリアリズム小説の読み方として、「ぼく」が男に出会ったのは現実の出来事であったのだ、と読む他はなかろう。国道沿いの空き地に停めたトラックに積んだ西瓜を売っていた男が実際にいたのだと。そうだとすると、何故、去年の夏には男を見掛けなかったのか、という謎が残る。去年も、その男は、同じ場所で西瓜を売っていたのに、「ぼく」が彼を見掛けたのは、「ことしが初めて」であった、という不思議。

我々は、自我に都合がいいようにしか現実を見ないのだし、関心があるものしか現実の中から見いださないのだから、去年の夏、「ぼく」が西瓜トラックの男を見掛けなかったことを謎としてそれほど不思議がることはないのかも知れない。去年の夏には、その男に関心がなかった、その男を必要としてはいなかった、つまり、「ぼく」にとって、その男は見たいものではなかったのだ、と考えればよいことかも知れない。

その意味では、国道沿いの空き地にいた西瓜トラックの男は、「ぼく」の関心、欲望を投影した幻像、「ぼく」の欲望が作り出した幻影であったのだ、と考えても同じことなのだ。「金を貯めて、友だちと二人で若狭の方に旅行する約束があったから、その年の夏休み、ぼくは生まれて初めてアルバイトをしたのだ」。十七歳の夏、「ぼく」の成熟過程の地殻変動が生じていたことは確かだろう。思春期の終わり、という自己コントロールの困難な心身の成長段階。意識と、意識にとって他者性としか感じられない身体性（性的欲動がその中心にあるだろう）の折り合いのつかぬ揺らぎ。生まれて初めて稼いだお金で旅立とうという「ぼく」の心模様には、大人になることへの憧れ、背伸びした大人意識が見られるであろう。意識の奥底で波立つ性的欲動、「焼けた釜の中のような、耐えがたい熱気」がその喩となっている性欲に突き動かされている身体性、そういう〈自己〉を投影した幻像、言わば、「ぼく」の〈自己〉のシンボルとしての西瓜トラックの男。意識の奥底に隠されている「ぼく」の暗い部分、「ぼく」が知らないもう一人の「ぼく」、つまり、見知らない他者としか感じられない、「ぼく」のシャドウ、それが西瓜トラックの男に他ならない。

国道沿いの空き地で、トラックにセーターを山積みにして売っている男がいたことを、植草さんから聞いた「ぼく」は、「きっとまたあいつがやって来たのだ」ととっさに思うのだ。西瓜トラックの男を〈あいつ〉と呼ぶ「ぼく」の意識（自我）。三年もの間、西瓜トラックの男が、「ぼく」の心の中心に居座り続けていたのだ、〈あいつ〉と呼ぶアンビバレントな思いを伴って……。嫌悪感と親愛感が入り交じっている〈あいつ〉。心が強く牽引される、忘れられない親密な存在。しかし（だからこそ、と言うべきだろうが）、「地道」で「利口な生き方」を現実の生の形にしようとする小市民である「ぼく」は、西瓜トラックの男を、〈あいつ〉として他者化（差異化）せざるを得ないのだ。距離を置く必要があるのだ。西瓜トラックの

男は、「ぼく」の意識に対する身体性、「ぼく」の自我に対する〈自己〉でもあるから、彼を〈あいつ〉と呼ぶのは、「ぼく」の〈自己〉を非自己化（他者化）しようとする衝動の現れと見ることも出来よう。西瓜トラックの男（「ぼく」の身体性、シャドウ）は、「ぼく」の意識にとって、異形の他者として感受されているのである。「ぼく」の暗い無意識の世界で暗躍する異形の他者、「ぼく」が知らないもう一人の「ぼく」。

役所が退けるのを待っていたら、もしかしたら、あいつはいなくなってしまうかも知れなかったからだ。もしきょう逢えなかったら、ぼくはあの三年前の夏の夕暮の、風で飛んで行ってしまった一枚の一万円札のことを、いつまでも忘れてしまうことはできないのだった。

植草さんの非難のこもった視線が気になりながらも、どうしても、セーターを売っている男の所に行ってみようと思う理由であるが、日本海の海辺の風景に心惹かれる理由について言葉を濁したのと同様の、心の真相を迂回する自己韜晦の語りだと言う他あるまい。〈あいつ〉のもとに行ってみようとする真の動機を偽っているのだ。

草叢で拾った一万円札を偽って取得したことの罪意識があったことは確かであろう。西瓜トラックの男に対する倫理的な後ろめたさが無かったわけではあるまい。しかし、その罪自体は、「しょうない、しょうない。お前、あとでもういっぺん捜してみィや。みつかったら、お前にやるわ」と、三年前に既に、男によって赦免されているのだ、とも言えよう。偽って取得した一万円札に対する倫理的なこだわりが、今なお渦巻いていたとは考えられない。後ろめたさという倫理的な罪意識と、男を〈あいつ〉と情念をぶつけて呼ぶ意識とは相容れない意識なのだから。倫理的なこだわりを隠れ蓑にして、〈あいつ〉に対する本音の情念を包み隠しているのだ。一万円札を偽って取得したことの倫理的な罪悪感の表明は、実は、〈あいつ〉に自己同一化をはかりたい欲望、自我の奥底で渦巻いている欲望に向き合うことを回避するための倫理的偽装だったのである。

三年前の西瓜トラックの男と共有した夏の日の体験を語った後の、物語の外枠を語る語りに戻ったときの語りに、「ぼく」の本音は臆病に漏らされているのである。

ぼくは夏が来るたびに、焼き肉屋の横の空地に、またあいつが来ていないものかと考えてしまう。セイタカアワダチソウの繁茂の奥で一万円札を見つけ

たことを、ぼくは一応あいつに報告しておきたいからだ。いや、それだけの理由ではない。アパートには相変わらずあの女が住んでいて、ときおり物干し場で洗濯物を干している姿が、役所に向かうぼくの目に映ったりすることも、教えてやりたかった。ぼくには何となく、あいつとあの女が、もうまったくあれっきりになってしまったような気がするからだった。

西瓜トラックの男に対する距離化（非自己化）の意識は、〈あいつ〉と呼称する親愛感に収斂しているであろう。〈あいつ〉との一体化。今、ここに、不在の〈あいつ〉との間で、〈あの女〉を共有しているような親密な一体化の感情……。〈あいつ〉が欲望を剥き出しに露出する行為を反復体験したい願望、〈あいつ〉に成り代わりたい激しい欲望が露呈しているであろう。

〈あいつ〉に一体化したい「ぼく」の欲望の実相を端的に言えば、「精気の抜けた、粘りつく自分のものを、冷たい濡れタオルで包んで拭いてみたい」という性的欲求である。性的身体に分節された女性存在に対する性愛関係。「ぼくは十七歳だったが、男の言っている意味は判った。」、知識としては知っているが、未体験の領域。知識で知っていることに踏み込んでみたい欲望。この意味で、〈あいつ〉は、「ぼく」の欲望を投影した分身、「ぼく」の欲望を代行する分身だと言えるだろう。

男は国道を渡り、田圃や畠のあいだを縫うようにして伸びている細道を歩いて行った。何もさえぎるものはなかったので、トラックの運転席に坐って見送っているぼくの目から、男の姿はいつまでも消えなかった。

アパートの一室のドアがあいて、男は出てきた。ぼくは再び男がこちらにやって来る姿を、片時も目をそらさずに見つめていた。

「ぼく」から離脱した性的欲求（性幻想）が分身の姿を借りて、〈あの女〉のアパートに行き来するのを見つめているようなシーンとして描かれているのである。「ぼく」の性愛関係の衝動を体現して、炎天下の道をアパートに向かって歩む分身、〈あの女〉の部屋で欲望を遂げて帰って来る分身。しかし、性愛関係が体験としては未知の領域である「ぼく」は、アパートの一室から弾き出されて、真夏の太陽に晒されているしかなす術がないのだ。〈あいつ〉が営んでいる性愛交渉の代替行為として、「ぼく」は、

「焼けた釜の中のような、耐えがたい熱気」に身悶えするしかないのである。「陽炎に混じって、ぼくの廻りでのたうっていた」夥しい自動車の排気ガスは、「ぼく」の中に渦巻いていた性的欲動の熱気の喩だと言うべきだろう。

〈あいつ〉に投影された「ぼく」の性愛関係の幻想……。体験としては未知の領域（「ぼく」の空白部）を埋めてくれる〈あいつ〉。〈あいつ〉が、「ぼく」の欲望の先行者、自己同一化したい憧れの分身であったことは、先ず、〈あいつ〉の肉体に釘付けになる「ぼく」の視線の熱さとして表現されているであろう。「男の見事な筋肉に見惚れて」、「体操の選手みたいやなァ」と言う「ぼく」。高校生のとき器械体操の選手であったという〈あいつ〉は、「並はずれて太く丈夫そうな首とぶ厚い胸」を持っていたのである。〈あいつ〉の肉体に向けられた驚きの視線には、「ぼく」の身体的なコンプレックスが貼りついているであろう。「ぼく」の語りに明示されていないひ弱な肉体への劣等感。（高校二年生の「ぼく」というより）回想している、成人式を前にした今の「ぼく」にとって、性愛の領域が空白として残る真の理由であると思われる。性愛関係に踏み込むことをためらわせている主因は、「ぼく」の身体的なコンプレックスであろう。「男のものは大きくて赤かった」という羨望の視線の語りにもそれは漏らされているのだ。ともかくも、性愛関係の取り結びに、逞しい身体が不可欠だと考える性愛幻想を「ぼく」が抱いていることは間違いあるまい。

「子供の寝ている横で、夏が楽しみや、ああ、夏が楽しみや言うて、腰を使いまくりよる。亭主より、俺のほうがええそうや」

ぼくは十七歳だったが、男の言っている意味は判った。

「まい日まい日、俺の来るのを待っとって、抱きついて泣きよるんや」

〈あいつ〉の性愛関係の形（「ぼく」の性愛関係の幻想）が露骨に示されているであろう。妻であることも、母親であることも忘れて、男の逞しい肉体に欲情し、性的に燃焼する女。女であることを、自ら性的身体にモノ化して、性的燃焼のみに自分を投げ出す女。そのような性的身体にモノ化された女と、逞しい肉体で、性愛関係を取り結び、女を性的に燃焼させること。〈あいつ〉に代行してもらった、「ぼく」の（幻想の）性愛関係の欲望の形である。

「何気なくアパートのドアのところを眺めていたぼく

は、子を連れた女が出て来て、そのまま階段を降り、陽炎と一緒にゆらゆら揺れながら近づいてくるのを、ずっと目を離さず見つめていた。」、「何気なく」というのは、「ぼく」の言い訳であろう。〈あいつ〉がアパートに行き来する動きを一心に目で追っていたのと同じ欲望が露呈しているのである。「何気なく」アパートのドアを眺めていたのではないはずだ。「ぼく」の欲望が、〈あの女〉の姿を探し求めていたのである。その意味で、「陽炎と一緒にゆらゆら揺れ」る〈あの女〉の像は、「ぼく」の性愛願望が作り出した幻影と言っても過言ではあるまい。

女がそっと男に囁いた声と表情は、ぼくにはなぜかひどく力のないやつれたもののように響いた。(中略)女は痩せていて色が白かった。胸も尻も肉が薄く、ふくらはぎにはたくさん青い血管が浮き出ていた。顎も細く尖り、唇は細く、口紅も塗っていないのにそこだけぽっと突き出たように目立つのだった。だが、女は、やはり美しいと言える顔をしていた。湯からあがったときみたいな湿りを目の周りに持っていた。

性的欲望の眼差しがとらえた〈あの女〉の不可思議な魅力。「ぼく」が高校生活(日常的現実)において接している女子生徒が持っていない、大人の女の性的身体の魅力。性的に成熟した、生活疲れをひきずった退廃的な女性性を漂わせた性的身体。「ぼく」の娼婦的アニマと言ってよかろう。「ぼく」の娼婦的アニマが現実世界に投影された幻影……。

〈あの女〉を眼前に見たときから、〈あいつ〉の存在を通り越した、〈あの女〉への欲望に変質したであろう。先程引用しておいた、物語の外枠を語る作品末尾の語りに、今現在まで持続する〈あの女〉への性的関心が露呈しているのだ。役所への行き帰りに、国道から三百メートルほど離れた女のアパートに視線を送っているのだから。〈あの女〉の領分に、〈あいつ〉を二重に空白化すること(高校二年の夏以来、〈あいつ〉が国道沿いの空き地にやって来ない設定にし、〈あいつ〉と〈あの女〉が、「もうまったくあれっきりになってしまった」と「ぼく」が想像すること)によって、ぽっかりと空いた〈あいつ〉の場所(不在)に忍び込み、そこに居座ろうとする欲望。〈あいつ〉の逞しい身体から解放された〈あの女〉と、〈あいつ〉に成り代わって、性愛関係を取り結ぼうとする欲求。

走りながら、ぼくはあのアパートを見た。田圃の向こうで、潮鳴りみたいに風が巻き、女の部屋にだ

け明かりが灯って、夜の海の沖合の、たったひとつきりの漁火に見えた。

現実生活（ペルソナ）の抑圧から解き放たれて、海辺の幻想風景に潜入していくことが出来た空間が、「ランプ」という名の喫茶店であったことが想起されるであろう。無意識の暗がりにいる〈自己〉を照らし出す「ランプ」。「ランプ」に照らし出された〈自己〉（シャドウ）に出会うかのように、高校二年の夏の体験を回想した後の「ぼく」は、〈あの女〉の生息空間を〈海〉に変換し、その海辺の風景に心をたゆたわせているのである。洗濯物を干している〈あの女〉の姿態に欲望の眼差しを送り続けていた「ぼく」……。〈あの女〉のアパートの明かりが「漁火」のように見えるのは当然であろう。「ぼく」を誘い寄せるために灯しているかのように見えるアパートの明かり。〈海〉のイメージに重なる女性存在と、そこから手招きする明かり。「ぼく」の海辺の風景への憧れは、〈あの女〉の明かりに誘い寄せられ、〈あいつ〉と〈あの女〉の間にあったような性愛関係を取り結ぼうとする性的欲望でもあったのだ。

しかし、〈あいつ〉に重なりたい「ぼく」の願望を、性的欲望のみに限定するのは、「ぼく」を見誤ることになるだろう。〈あいつ〉への吸引の中心に、性的欲望の発動があることは間違いないが、「生きるという闘いに関して逞しかった西瓜売りの男」の〈野性〉への羨望の念があったことを見落としてはいけないのだ。地道な公務員の、生の燃焼から疎外された、虚しい安定に居座る「ぼく」に欠けていた〈野性〉、小市民のペルソナの奥に抑圧していた〈野性〉。〈あいつ〉（シャドウ）に対するコンプレックスを伴った羨望の念があるのだ。

この意味で、成人式を目前にして、「ぼく」は、植草さんと〈あいつ〉との間で揺れている、と言えるのだ。「一生、普通に生きていくことを決定してしまった」男が植草さんである。植草さんに成り切ることへのためらい。本当には人生を決定していない「ぼく」は、成人式を目前にして、人生を決定することから逃げているのだ。植草さんへの反発と〈あいつ〉への羨望の念を吐露することで……。

（本学人文学部教授）